女性性に関する研究の動向と展望について

―生涯発達的視点の必要性―

瀬戸山　聡子

Research Trends and Views on Femininity: The Need to Consider Life-Span Development

Akiko Setoyama

This article reviews previous research on femininity in the field of psychology and in the learning of a proximal domain mainly focusing on research trends in Japan. In psychological research, differences are found corresponding to sex/gender roles deriving from biological differences. This research has lead to a change from the view that masculinity and femininity are two poles of the same dimension to the view that they are different dimensions. When the characteristics of femininity were examined, the item of appearance was included in a measure that was developed in Japan. Appearance is a more important facet of femininity even than motherhood. However, in recent years, research on femininity has declined in psychological research; on the other hand, in educational sociology or pedagogy, the new viewpoint considers "femininity as a means." Finally, in future research, we need to examine the viewpoint of life-span development and the femininity of the middle aged — a topic that has not attracted attention until now.

1．問題と目的

女性性とは、一般的には、女性らしさや女性に望ましい特性、女性的なイメージなどの総体として捉えられており、個人の知覚・認識・感情・行動などの様々なレベルで表出する、とされる（江原・長谷川・山田・天木・安川・伊藤，1989；神田，1993）。しかし、改めて女性性の概念を定義しようとする時、日常生活におけるその多義的な使われ方を考えると、厳密な意味での概念把握は困難である。油井（1995）は、女性性の概念がその国の政治経済や文化レベルによって異なるだけでなく、そこに生活する一定の集団や個人によっても同一でないこと、また、たとえその中の準拠枠によって画一化された概念でさえも、時代的変遷を受けることにより変転する可能性を指摘している。『広辞苑』（第六版，2008）にてその意味を確認してみたところ、女性性についての説明は記載されていない。

一方、女性性の「性」には、生物学的性（sex）と、社会的性（gender）の二種類の捉え方がある。土肥（1999）や小倉（2000）によると、gender という用語を初めて用いたの

はMoney（1955）であるとされる。彼は、この単独研究や共同研究（Money, Hampson, & Hampson, 1955a; 1955b）において、生物学的に「半陰陽（hermaphroditism）」と呼ばれた患者たちとの面接を実施したり過去の症例記録を調べた結果、人間の性が生物学的要因だけでなく心理社会的要因によっても決定されることを指摘し、gender および gender role の概念を提唱した。このように、今や sex は生物学的性、gender は社会的性として別に扱うべきであるというのが自明であるが、下條（1997）は両者の取り扱いについての例外を提案している。それは、「研究史的用法では、sex と gender を同義、あるいは置き換え可能なものとして使う」ことであり、その理由として、gender という用語が一般的に心理学論文で使用されるようになったのが1980年代以降であるため、それ以前のほとんどの先行研究では sex（たとえば sex role など）として記述されていることを指摘する。本稿でもこの下條（1997）の用法を採用し、性役割という用語については sex と gender の両者を含めたものとして検討することとする。

本稿では、女性性という概念を捉えるために、いくつかの切り口より比較対象となる概念を仮定した上で、歴史的に検討する。その際、女性性概念は社会文化的な影響を強く受けると考えられるので、今回は、主に日本の研究動向を中心に追ってゆくこととする。まず第一に、最も明確な比較対象として男性性を挙げ、その際、上記の生物学的性による比較から性役割による比較への変遷について触れる。なお本稿では、生物学的性、社会的性、そして性役割の概念そのものについての詳細な説明は割愛する。第二に、生物学的性は同一ながらも、近年の心理社会的環境の複雑化によりしばしば女性性の比較対象とされる、母性との差異を検討する。ただし、母性については、先行研究によって母性と母性性の二通りの記述が存在するが、本稿において紹介する論文については同義語として取り扱い、便宜上、母性という記述にて統一する。そして第三に、心理学の近接領域での学問における、新たな女性性の捉え方について検討を行う。なお「フェミニズム運動」に関わる先行研究については、今回は検討対象とせず、女性性についての実証的研究についてのみ言及する。

このように、本稿では女性性についての心理学研究および近接領域の学問での先行研究をレビューし、これらにおける様々な概念把握の仕方や具体的内容、その測定方法などを整理する。さらに、これらの先行研究の限界点および今後の課題としての、生涯発達的な視点について検討する。具体的には、成人期以降の発達の視点として、今までは研究対象としてあまり注目されてこなかった中年期女性の女性性について、その視座の必要性と中年期女性が自らの女性性を意識し、活用することの重要性を提示することを目指す。

2．女性性と男性性

(1) 性差研究の歴史的背景

伊藤（1984）によると、産業革命の後、地方の農村の人々が仕事を求めて大量に都市に流入し、その多くが工場労働者となった。そして、工場では女性も重要な労働力の担い手

と期待されたという。さらに間宮（1979）は、19世紀後半からの教育や産業経済の発展により、女性に対する教育の必要性について社会的関心がもたらされたと共に、その知能や職業的能力への関心も高まったこと、さらに20世紀初頭に世界規模で起きた経済恐慌の混乱により、労働市場の要請に呼応して、女性の知能および職業能力を測定する必要が生じ、結果として性差研究が始まったと指摘している。そのような理由から、第二次大戦までの性差研究においては、性差とは生物学的性によるものであり、男女間の能力や特徴の差を明らかにすることのみが目的であった。

第二次大戦後、政治・社会や家族環境の全世界的変化、男女平等化の流れに後押しされた女性（既婚／未婚問わず）の社会進出に伴い、それまでの男女の役割は次第に変化し、同時に男女の関係をも見直すこととなった。それについて伊藤（1984）は、「単に性差を測定・比較・記述する静態的な捉え方から、性役割を形成する心理社会的、文化的条件を明らかにしようという動態的な捉え方への変化」であったと指摘する。その結果、性役割（sex/gender role）研究は急速に発展し、今日に至っている。

(2) 生物学的性における性差研究

間宮（1979）は、第二次大戦前の日本においては「性差研究の成果が乏しいことから、社会における皮相的な男女に対する見方が性差の事実や男女それぞれの特質に対する見方を左右していた」（p.6）ことを指摘し、それまでの直接的に数値を比較して優劣を論じる性差研究を批判した。その際、男女の身体的発達の差異を例に挙げ、性差を比較する際に「測定値そのものの比較における男女の差異を『絶対的差異』と呼ぶならば、男女を別集団とした上での、個人の測定値と同性の成熟水準（平均水準）との距離の差を『相対的差異』と呼ぶことができる」（p.7）とし、相対的差異による性差研究こそが教育的に意義があるものとし、更なる充実の必要性を主張している。

一方、岩動（1974）は、性分化の仕組みより生物学的性の決定を説明している。それによると、生物学的性は、まず精子と卵子の合体による受精卵の性染色体の組み合わせにより決定され、それを「染色体上の性」と呼ぶという。次に、胎生期の中で睾丸、若しくは卵巣を形成する性腺の分化が起こり、それを「性腺レベルでの性」と呼ぶ。そして最後に、性器の形に現れる性の区別が出現する、とされる。なお、岩動（1974）はこの性器の形による性の判断のことは「○○の性」とは呼んでいないが、これについて山口（1995）は、「性器の形による性」と命名した。そして、個々人は生まれた瞬間に身体的特徴から「戸籍上の性（岩動，1974）」が決定されるが、性分化そのものは誕生時点で終了するわけではなく、成長し思春期を経て結婚し、子どもができるという長い過程の中で完成されるものであると述べ、生物学的性の性差研究についての発達的意義を主張している。また、その上で前述の「半陰陽」という生物学上両性的な機能をもつ人たちの存在を紹介し、生物学的性でさえも、従来考えられているほど自明のものではないことを指摘している。

(3) 性役割における性差研究－海外の代表的スケール

性役割における性差研究は、女性性と男性性についての概念と測定方法の変遷と言って

も過言ではない。

初期の性差研究は、性度テストより始まった。東（1986）によると、性度テストとは、個々人が属する文化で男性／女性が典型的に示す行動・興味・態度・パーソナリティ特性の程度を量の違いに置き換えて測るものであり、性度についての最初の実証的研究は、1936年に Terman & Miles が M-F テストを考案したことに遡る、とされる。Terman & Miles（1936）は当時、様々な年齢や職業の男女約6,000人に対し、心理的特性（性格・気質・感情・興味・思考など）を測定し、それを性度として尺度化したのであった。さらに東（1986）は、その後1943年に開発された MMPI 中の MF 尺度、1964年の California Psychological Inventory（CPI）中の Femininity Scale など、著明なスケールが次々と発表されたと述べている。MMPI は、精神医学的診断に客観的な手段を提供するために開発されたものであり、MF 尺度は、個々人の興味がどの程度男性的／女性的かを測定する（MMPI 新日本版研究会，1993）。CPI は、主に精神疾患のない人々を対象として、パーソナリティの健全な側面を把握するために開発されたものであり、Femininity Scale は女性的傾向を測定する（我妻・川口・白倉，1967）。これらの性度テストでは、その人の男性性が強い場合は同時に女性性が弱く、女性性が強い場合は同時に男性性が弱いと考えられているのが特徴である。つまり1960年代までのスケールでは、男性性と女性性を一次元的尺度の両極に仮定していたのであった（東，1986；下條，1997；山口，1995）。

その後1970年代に入り、Constantinople（1973）は性度を一元的尺度で捉えることへの批判と、男性性と女性性がそれぞれ別の次元に属することを提唱した。性差研究は新たな動向を示し始め、男性性／女性性をそれぞれ測定する性役割スケールが開発されるようになった（東，1986）。また下條（1997）は、新たな性役割スケールは、男性性を測る Masculinity Scale と女性性を測る Femininity Scale が別次元で仮定される、二次元モデルに相当すること、その二次元モデルから、心理的両性具有の特徴を示す Androgyny という考え方が生まれ、そのような特徴を示す人が最も適応的と見なされるようになったと指摘する。そして、さらに東（1986）によると、これらのスケールの中で代表的なものとして、Bem（1974）の Bem Sex-Role Inventory（以下、BSRI と記す）、Spence, Helmreich & Stapp（1975）の The Personal Attributes Questionaire（以下、PAC と記す）、Heilbrun（1976）の The Masculinity-Femininity Scale of the Adjective Check List（以下、ACL の男性性／女性性尺度と記す）が挙げられ、これらは、現在も性差研究の際には頻繁に利用されているという。BSRI は、項目選択の際に男女大学生を対象として、男性性と女性性の望ましい人格特性および、社会的に望ましい人格特性の 3 つの下位尺度（合計60項目）より成る。BSRI の女性性の項目を Table 1 に記す。「従順な」「人の気持ちを汲んで理解する」「はにかみ屋の」「子どものように純真な」などの、伝統的に望ましい若い女性の特性をイメージする項目により、構成されていると考えられる。

PAC は、Spence et al.（1975）が Rosenkrantz, Vogel, Bee, Broverman, & Broverman（1968）の Sex Role Stereotype Questionare の項目をもとに、男女大学生を対象に作成した、男性

Table1　BSRI 女性性項目（日本語版）

従順な
明るい
はにかみ屋の
情愛細やかな
おだてにのる
忠実な
女性的な
同情的な
困っている人への思いやりがある
人の気持ちを汲んで理解する
あわれみ深い
傷心した人をすすんで慰める
話し方がやさしくておだやかな
心が暖かい
優しい
だまされやすい
子どものように純真な
ことば使いがていねいな
子ども好き
温和な

東（1986）表1を一部改変

性と女性性の望ましいある一側面を測定するための尺度である。具体的には、「男性性の中の『自己主張的』『道具的』人格特性と、女性性の中の『対人的』『表出的』人格特性」（下條，1997）で、各質問項目が双極性次元（たとえば、全く親切でない－非常に親切である、など）で記述されている。初期の PAC は男性性尺度23項目、女性性尺度18項目、男性性／女性性両方を測定する尺度13項目（以下、MF 尺度と記す）、その他 1 項目であったが、後にその他項目を除き、各尺度が 8 項目から成る簡易版 PAC が作成された。現在主に使用されているのは簡易版 PAC である（東，1986）。簡易版 PAC の女性性尺度と MF 尺度の項目を Table 2 に示す。「全く感情的でない－非常に感情的である」「全く傷つかない－非常に傷つきやすい」「決して泣かない－すぐに泣く」など、確かに対人的特性や表出的特性により構成されていると考えられる。

Heilbrun（1976）が開発した ACL の男性性／女性性尺度は、男女大学生を対象に、項目選択の際に初期の性度テストと同じ手法－男性には男性性尺度の項目を、女性には女性性尺度の項目を選び出させた－を用いた（東，1986）とされる。ただし、初期の性度テストと異なる点は、被検者に男性性の高い父親像をもつ男子学生と、女性性の高い母親像を

Table2　簡易版 PAC 女性性／MF 尺度項目（日本語版）

女性性		
全く感情的でない	－	非常に感情的である
献身的になることが全くできない	－	おおいに献身的になることができる
非常に荒っぽい	－	非常におとなしい
人のために自分を役立たせることができない	－	人のために自分を役立たせることができる
全く親切でない	－	非常に親切である
全く人の気持ちに心を配らない	－	非常に人の気持ちに心を配る
他人を全く理解しない	－	他人を非常に理解する
他人との関係において非常に冷たい	－	他人との関係において非常に温かい
MF		
全く積極的でない（女性）	－	非常に積極的である（男性）
非常に従順である（女性）	－	非常に支配的である（男性）
重大な危機にも全く興奮しない（男性）	－	重大な危機に非常に興奮する（女性）
非常に家庭志向的である（女性）	－	非常に社会志向的である（男性）
自分のやった事を他人に認めてもらうことに無関心である（男性）	－	自分のやった事を他人に認めてもらうことを非常に必要とする（女性）
全く傷つかない（男性）	－	非常に傷つきやすい（女性）
決して泣かない（男性）	－	すぐ泣く（女性）
安心を得るための何らかの保証をほとんど必要としない（男性）	－	安心を得るための何らかの保証を非常に強く必要とする（女性）

東（1986）表2を一部改変

もつ女子学生を採用したことにより、「生物学的性だけでなく心理的男性性／女性性をも強く反映している」（下條，1997）という。ACL の女性性尺度項目を Table 3 に示す。「思いやりがある」「内気な」など、従来の伝統的に女性に望ましいとされる特性に加え、「魅力的」「女性的」など、外見的魅力に言及する項目や、「浮気っぽい」「あわただしい」などの、社会的に望ましくない人格特性も含まれているのが特徴である。

性役割スケールでは、作成過程において男性に男性性項目のみを、女性に女性性項目のみを訊ねるものと、全員に対して男性性／女性性両項目を訊ねるものとが存在するが、使用する際は、全員に対して全尺度項目が用いられている。

Table 3　ACL 女性性項目（日本語版）

魅力的
快活な
複雑な
良心的
思いやりがある
協力的
夢想しがちな
熱心な
女性的
浮気っぽい
あわただしい
内気な
かざり気がない
神経質な
感傷的
誠実な
同情的
対処がうまい
人をよく理解する
無欲な
心が暖かい
気がかりが多い

東（1986）表 3 を一部改変

(4) 性役割における性差研究－国内で開発されたスケール

次に、わが国で開発された代表的な性役割スケールを紹介する。まず、柏木（1972, 1974）は、予備調査により選定した34対の形容詞を用い、中学・高校・大学生男女を対象に青年が認知する性役割期待を実証的に研究し、男性役割に関する次元（尺度）として「知性」「行動力」因子を、女性役割に関する次元（尺度）として「美・従順」因子を見出した。このうち、女性役割に関する次元（尺度）の項目を Table 4 に示す。「従順な」「気持ちの細やかな」など、従来の伝統的に女性に望ましいとされる特性に加え、「容貌の美しい」「かわいい」など、外見的魅力についての項目から構成されていた。

また伊藤（1978）は、成人男女（男性：20～60歳，女性：20～61歳）を対象に「男らしい／女らしい」とされる項目を提示し、それぞれ男性性／女性性としての望ましさを訊ねることにより、M(Masculinity)・H(Humanity)・F(Femininity)の 3 因子から成る M-H-F scale を開発した。そして1986年には、性役割の意味構造をさらに検討するために、性役割測定尺度（Ito Sex Role Scale 以下，ISRS と記す）を開発した。その際、項目選定では予備調査で男女大学生を対象に、「男らしさ（女らしさ）の肯定的（否定的）側面」についての特徴を自由記述形式で訊ね、収集した。実際の尺度開発では、選定された全項目に対し「一般に男性（女性）にとってもたれている」性役割期待と、

Table 4　柏木（1974）の女性役割に関する次元

第Ⅱ因子（美・従順）
従順な
謙虚な
男性に依存的
容貌の美しい
かわいい
気持ちのこまやかな
仕事に専心的（－）
積極的

（－）は逆転項目
柏木（1974）TABLE 1 を一部改変

Table 5　伊藤の M-H-F Scale(1978)と ISRS(1986)の項目比較

M-H-F Scale の F 項目	ISRS の「美・繊細さ」因子項目
おしゃれな	おしゃれな
色気のある	色気のある
かわいい	かわいい
繊細な	繊細な
言葉使いのていねいな	言葉使いのていねいな
優雅な	細やかな
従順な	
静かな	
献身的な	
愛嬌のある	

伊藤（1978）TABLE 1 と伊藤（1986）TABLE 1 を一部改変

個人評価の 3 種類を評定させた。その結果、「行動性」「共同性」「美・繊細さ」因子が見出され、この 2 尺度を検討した結果、女性性については、M-H-F scale の F(Femininity)項目と、ISRS の「美・繊細さ」因子項目がほぼ対応することが示された。両者を Table 5 に示す。「おしゃれな」「色気のある」「かわいい」「繊細な」「言葉使いのていねいな」などは、両尺度ともに含まれていたが、従来の伝統的に女性に望ましい特性とされる「従順な」「静かな」「献身的な」などは、新たに作られた ISRS には含まれていなかった。1970年代から1980年代にかけて、日本でも伝統的な女性特性のうち、これらの自己抑制的な特性については、女性性として必ずしも望ましいものとは考えられなくなっているようである。

一方、石田（1994）は、男女大学生を対象に予備調査により選定した、男性性項目・女性性項目・両性具有項目の 3 つの下位尺度（合計36項目）から成る性アイデンティティ尺度を用い、それぞれ(1)男性／女性の社会通念としてどの程度一般的だと考えられるか、(2)現実の自分自身にどの程度あてはまるか、(3)自分自身の理想にとってどの程度あてはまるか、を訊ねた。このうち、女性性項目と両性具有項目を Table 6 に示す。「おしゃべりである」「そうじや洗濯がむいている」「洋服や髪形に気を配る」「可愛らしさをもっているほうがよい」など、今まで採り上げてきた尺度の内容とは異なる、女性として望ましい特性というより、女性役割に対する本人の価値観や態度に、よりシフトした表現内容に変わっていると思われる。本稿の冒頭で、下條（1997）が、gender という用語が一般的に

Table 6　石田（1994）の性アイデンティティ尺度の女性性／両性具有項目

女性性	両性具有
育児にむいている	容貌が美しいほうがよい
おしゃべりである	行儀が悪いのはよくない
すぐ泣くものである	友達が何か問題を抱えている時にそれを助ける
気持ちが細やかである	社交性に富んでいる
従順である	自分のことを自慢する
占いや運命による人生を信じやすい	料理をするのがむいている
そうじや洗濯がむいている	正直である
冒険的物語よりも感傷的物語の方を好む	想像力豊かである
洋服や髪型に気を配る	富を重視する
感情を思考から切り離せない	自由を重視する
可愛らしさをもっているほうがよい	学歴がある方がよい
結婚によって人生が決まる	興奮しやすい

石田（1994）より作成

心理学論文で使用されるようになったのは1980年代以降であることを指摘しているように、1990年代からは、日本においても性役割スケールで gender role を測定する尺度が開発されるようになったことを示す変化であると考えられる。なお、本尺度でも「洋服や髪形に気を配る」「可愛らしさをもっているほうがよい」は女性性項目に含まれていたが、「容貌が美しいほうがよい」は両性具有項目に含まれていた。容貌の美しさは、性別に限らず必要な特性であると考える傾向になってきたのかもしれない。

これらのスケールと前述の海外のスケールをまとめると、「従順な」「やさしい」「感情的である」などの行動・パーソナリティ特性に加え、日本で開発された尺度では、柏木（1974）により「美・従順」因子として「容貌の美しい」「かわいい」という美に関する項目が、伊藤（1978, 1986）により「かわいい」「色気のある」「おしゃれな」という外見に関する項目が、石田（1994）により「洋服や髪型に気を配る」「可愛らしさをもっているほうがよい」という容姿への気配りの必要性に関する項目が、女性性として取り入れられていることが示される。

一方、山口（1985）は、ユング心理学的な元型イメージより[注1]、男性性／女性性を(1)子どもに対する父親（父性）／母親（母性）としての側面と、(2)異性に対する男性／女性としての側面の二つがあると捉え、「大人としての」それぞれのイメージを訊ねることにより、父性（Masculinity-father:Mf）／男性（Masculinity-man:Mm）、母性（Femininity-mother: Fm）／女性（Femininity-woman:Fw）、大人（adult:A）から成る尺度を作成した。項目の選定にあたっては、中学生と高校生を対象に集めた予備調査での結果と、先行研究（柏木, 1974；伊藤, 1978など）で作成された項目とを合わせている。ここでの大人（adult:A）は、伊藤（1978）の H（Humanity）を想定したものである。このうち、母性（Femininity-mother: Fm）／女性性（Femininity-woman:Fw）項目を Table7に示す。山口（1985）により、性差研究の性役割スケール開発において、父性／母性の観点が取り入れられた。母性項目としては、「つつみこむような」「献身的な」「あたたかい」などの伝統的に女性に望ましいとされる特性が多く挙げられた。また女性性としては、柏木（1974）、伊藤（1978）、石田（1994）と同様、「かわいい」「色気のある」「おしゃれな」という外見に関する項目も含まれていることが示されている。

Table 7　山口（1985）の母性／女性性項目

母性（Femininity-mother：Fm）	女性性（Femininity-woman：Fw）
子どもを育てる	かわいい
つつみこむような	色気のある
いつくしみ深い	しなやかな
自己犠牲的な	曲線的な
かいがいしい	おしゃれな
子どもを産んだことのある	細やかな
ふくよかな	声が高い
献身的な	従順な
あたたかい	情緒的な

山口（1985）Table 1 を一部改変

(5) 近年の女性性に関する研究の動向

このように、わが国でも1970年代から1990年代にかけて、多くの性役割スケールが翻訳、開発された。今世紀に入り、わが国における性差研究の動向は、さらなる局面を迎えている。1990年代後半以降の心理学研究では、パーソナリティ特性を背景にした男女の性差や、女性性に焦点を当てた研究が少なくなってきているのである。勿論、前述の性役割スケールを利用した研究は散見される。たとえば、岩崎（2001)、山本（2005)、森・高橋・牛島・中山（2005）ではBSRIが用いられ、橋本（2007）ではM-H-F scaleと山口（1985）の母性（Femininity-mother:Fm）尺度が、後藤・廣岡（2003）でもM-H-F scaleが用いられている。さらに、関根（2005）のように、これらの尺度を比較検討する研究もある。しかしながら全体的な傾向として、女性性をテーマとする心理学研究は1990年代後半以降、減ってきていると考えられる。

理由として、2つ挙げられる。第一には、海外、特に米国における性役割研究の動向に呼応する形で、わが国でも性役割研究の潮流がジェンダー・スキーマ理論（Bem, 1981）やジェンダー・ステレオタイプの概念（Lippa, 1990）を背景に、新たな方向へと進んできたことにある。スキーマとは、一般に、人が日々の経験や繰り返し行われる体験によって身につける知識を構成するモジュールとして想定される概念（三宅, 1999）とされる。Bem（1981）はスキーマについて、認知的な構成概念で個人の認識を組織化し誘導するネットワークであり、後から入って来る情報を自分の中の関連する知識の中で探索し、理解する仕組みとして機能する、と述べている。つまり、個人がある対象を認知しようとする際に、個々の知識を統合、組織化し情報処理を行う枠組みと考えられる。そしてジェンダー・スキーマとは、Bem（1981）がスキーマの1つとして提唱した、個人が自分のもつ社会的性役割に基づいて情報処理をするための認知的枠組みで、情報の選択、記憶、再生などの認知活動を方向づけするという（土肥, 2006；2008)。一方、ジェンダー・ステレオタイプとは「人々が共有する、男性と女性の性格特性、能力、社会的役割、身体的特性、性的行動などについての構造化された思い込み、信念」(Lippa, 1990）とされる。そしてジェンダー・ステレオタイプはジェンダー・スキーマによる対人認知の結果であり（土肥, 1999)、「女性は○○であるべき」などのような社会的規範として強く働くという（土肥, 2006；2008)。つまり、性役割に基づく個人の認知枠組みと共有化された思い込みや信念を背景にした行動特性への態度を尺度とした性役割研究へのシフトにより、パーソナリティ特性に対する価値観を尺度とした性差研究が減少したと推察される。

わが国の、性役割態度を測るスケールとして代表的なものに、鈴木（1987;1991）の平等主義的性役割態度スケール（Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes 以下, SESRAと記す）がある。鈴木（1991）は当時、性役割研究の動向について以下のように述べている。それによると、性役割についての研究分野には性役割採用（性による顕在的行動特性)、性役割発達（自分の性にふさわしい役割の習得)、性役割同一性（自分自身の男性性／女性性についての知識)、性役割選好（性に関連した行動を採用する願望)、性役割態度（性役割

に関する問題に対する態度)、男性性（masculinity）・女性性（femininity）・両性具有（androgyny）などがあると考えられ、米国ではフェミニズム運動を経て、様々な性役割態度測定スケールが開発された。しかし日本の性役割スケールはごくわずかしかなく、しかも代表的なものは男性性・女性性・両性具有を測定するスケールで、性役割態度についての日本独自のスケールがなかったという。SESRA は、「結婚観」「教育観」「職業観」「平等・自立の意識」の 4 因子から成り、その中の逆転項目を中心に作成された15項目の SESRA の短縮版 SESRA-S（鈴木，1994）が、現在主に使用されている。SESRA-S の質問項目を Table 8 に示す。「女性が社会的地位や賃金の高い職業をもつと結婚がむずかしくなるから、そういう職業を持たないほうがよい（逆転項目)」「家事は男女の共同作業となるべきである」など、Table 1〜7 に記されているような女性に望ましい特性とは異なり、ジェンダー・ステレオタイプ的な行動や社会的規範に対する、本人の価値観や態度を訊ねる内容へと変わっていることがわかる。SESRA-S が用いられた研究としては、戸上（2001)、齊藤（2004）などがある。

Table 8　鈴木（1994）の SESRA-S 質問項目

項目No.	内容
1	女性が社会的地位や賃金の高い職業をもつと結婚するのがむずかしくなるから、そういう職業を持たないほうがよい(−)
2	結婚生活の重要事項は夫がきめるべきである(−)
3	主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい(−)
4	女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である(−)
5	主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない(−)
6	結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい
7	家事は男女の共同作業となるべきである
8	子育ては女性にとって一番大切なキャリアである(−)
9	男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である(−)
10	娘は将来主婦に、息子は職業人となることを想定して育てるべきである(−)
11	女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい(−)
12	女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である
13	女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい
14	経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい(−)
15	女性は家事や育児をしなければならないから、あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい(−)

(−)は逆転項目
鈴木（1994）Table 1 を一部改変

二番目の理由は、社会的背景にある。男女共同参画社会基本法が1999年に成立し、その前文において「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現は、緊要な課題となっている」（内閣府男女共同参画局，1999）と明記された。このような流れの中で、それまでの男性／女性の望ましい性役割についての研究が減少していったのではないだろうか。松浦（2008）はこれについて、従来の男性は仕事、女性は家事・育児といった

ステレオタイプ的な性役割が変わりつつあることを指摘した上で、これまでの男性－女性の二元論そのものの捉え直しなど、今後の新たな研究動向を示唆している。

3．女性性と母性

(1) 母性の定義と女性性との差異についての見解

母性については、『広辞苑』（第六版，2008）にも説明があり、それによると「母として持つ性質。また、母たるもの。」とされる。大日向（1988）は、母性概念が多義的に使われていることを指摘しており、かつては、医学や保健衛生の側面で子どもを産み育てるための特性として、妊娠・分娩・産褥期・授乳期の女性を対象にされていた母性という概念が、より広く女性一般に拡大解釈され、女性が生まれながらにしてもつ一般常識的な価値観を含むものとされてきていると報告している。

内藤（1992）は、母性の定義について、2つの解釈を紹介している。それによると、1つは「母親の子どもに対する意識や感情や作用が概念されている、『伝統的』母性観」で、他方は「母親のものと限定せず、成熟した人間が幼いものや弱いものに対してもち得る意識や感情や作用」という。そして後者は、前者の「母親に固有の」「母親が普遍的に備える」といった意味を含む母性観に疑問を呈し、再定義した試みであるとされる。前者は、古くから言われるいわゆる伝統的な母性の定義であり、後者については、前者をより様々な女性の立場からより本質的な部分を捉えた定義であると考えられる。

母性と女性性との違いは何処にあるのか。松本(1984;1992)は、母性は子どもを産み育てる、つまり生殖の概念であり、女性性は男女の絆、つまり性に関する概念であるが、現代は性と生殖が一体であった近代とは異なり性と生殖が分離しているという意味から、母性と女性性は区別しなければならないと述べている。なお、この場合の「性」とは「性行動」を示していることは言うまでもない。

(2) 女性性と母性との比較－国内で開発されたスケールおよび実証的研究

まずは前述の、山口（1985）の父性（Masculinity-father:Mf）／男性（Masculinity-man:Mm）、母性（Femininity-mother:Fm）／女性（Femininity-woman:Fw）、大人（adult:A）尺度が挙げられる。角田（1994）は、この尺度を用いて共感性との関連を検討した。また鈴木（2001）は、思春期女子を対象に女性性受容尺度を作成した。それは「母性」（「子どもを生めるのは女性の喜びだ」「将来、ぜひ子どもを生みたい」など）、「女性の身体受容」（「女性であれば月経があるのは当然だ」「初潮を迎えた時はうれしかった」など）、「中核的受容」（「女性に生まれてよかった」「今度生まれてくるとしたら女がよい」）、「消極的受容」（「女性は、甘えが許されるので有利である」「女性は、か弱いので男性が守ってくれる」など）の4因子で構成される。そこには、思春期女子が予想する望ましい母親や女性としての意識と、望ましくない女性の意識が示されているように思われる。この尺度を用いた最近の研究としては、鈴木・高橋（2005）による、女子学生（それぞれ四年制大学、短期大学、看護学校に在学する）を対象にした女性性受容の在り方について、質問紙およびロールシャッ

ハ・テストを用いた手法が挙げられる。

一方、石崎・石崎・桂・織田・日暮・原（1996）は、10～70歳代521名（男性203名、女性318名）に対して母性・女性性・父性・男性性のイメージを自由記述形式で訊ねた。その結果、母性と女性性では、出現頻度の高いイメージに差異が見出された。母性と女性性について、出現頻度の高かった上位10語を Table 9 に示す。

この結果において注目したいことは、まず両者とも「優しさ」「思いやり」は特に上位に挙がっていたものの、母性イメージでは「強さ」「あたたかさ」「包容力」など、内面的なものが多く選ばれているのに対し、女性性イメージでは「美しさ」「かわいらしさ」「清潔」などの外見的特徴に通じると考えられるものが選ばれている点である。これについて、石崎他は「一人の女性が常に母性と女性性の両方の特徴を兼ね備えるのは本質的に難しい課題である」などと指摘している。それによると、多くの人々は、女性は母親になり女性性から母性へとスイッチすることにより人間的に成長する、というイメージをもっていると考えられる。

Table 9　石崎他（1996）の母性／女性イメージ出現頻度上位10語

順位	母性イメージ	順位	女性性イメージ
1	優しさ	1	優しさ
2	強さ	2	思いやり
3	思いやり	3	美しさ
4	あたたかさ	4	気配り
5	包容力	4	明朗
6	愛情	6	かわいらしさ
7	明朗	7	清潔
8	厳しさ	8	素直
9	忍耐	9	あたたかさ
10	たくましさ	10	弱さ
		10	微笑み

石崎他（1996）Table 2 を一部改変

なお、山口（1985）は前述の通り、ユング心理学的な立場から元型のイメージより母性と女性性を検討したが、彼女の尺度においても女性性として外見に関する項目が見出されたことは、日本の文化的な特徴を反映しているのかもしれない。

(3) 母性に関する研究の動向

母性に関する研究についても、1990年代頃より変遷が見られる。それは、子どもを生み育てる＝生殖という本来の狭義の枠組みとしての母性研究における、使用概念の変化であった。その頃より、生殖に関する母性は、親準備性、養護性、育児性という概念に置き換えられるようになったのである。そこには、女性性の場合と同様、1999年の男女共同参画社会基本法の成立も深く影響していると考えられる。つまり、男女とも生物学的性にかかわりなく、少子高齢化社会に対応していくために親準備性や養護性、育児性を発揮することが求められ、研究動向もそれに沿ったものに変化してきたというわけである。そのような社会的要請の中で、生殖に関する母性と女性性とを対比させた研究が少なくなり、併せて

両概念が切り離されて考えられるようになったのは自然なことと推察される。

4．近接領域の学問における女性性

近年、心理学の近接領域の学問において、女性性の様々な側面を指摘する研究が見られる。吉原（1995）は教育社会学の立場より、就職活動期の女子大学生の職業選択における志向やキャリア・パターンを左右する要因を検討するにあたり、女性性を「一般的に『女の子らしさ』『女性らしさ』といわれるものであり、『女』カテゴリーに付与される社会的・文化的意味の総体」とした上で、その研究での定義を「『女性であること』へのコミットメント、『女』カテゴリーとの距離感」と捉え、具体的には「自分自身を女性らしいと思うか」「女性に合った仕事をしたい」「女性に必要なこととは何か」という質問項目への回答とした。その結果、この時期の女子大学生は、職業選択において女性であることを意識させられること、女性性を希望する企業に採用されるための戦略として用いることを明らかにした。谷田川（2006）も、同様の立場からこの「女性性の戦略性」について注目し、女子学生（それぞれ四年制大学、短期大学、専門学校に在学する）に対し、自分自身の「女らしさ」について自由記述形式で訊ね、内容を分析した。その結果、女子学生の女性性意識を表す指標は「恋愛・異性」・「メイク（化粧）」・「ファッション」で、この女性性指標と将来のライフコース展望との関連について、現代の女子学生は「仕事か、結婚か」の選択肢ではなく、「結婚も仕事も」という視点で将来のライフコースを考えていることが示唆された。

さらに、神宮（2003）は教育学の立場から、女子中学・高校生のいわゆる「援助交際」を従来の性的逸脱行為の文脈から切り離した。つまりその行動を、思春期女子が自分の身体という資源を用いることにより、消費という自己の目的を達成するために必要となる対価獲得の労働手段としての「サバイバル戦略」と位置づけたのである。またさらに、女性の将来戦略を、「キャリア志向型」「良妻賢母志向型」に加え、このように女性性の身体的特徴を武器に生き抜くライフコースを「女性性志向型」将来戦略と類型している。

これらの先行研究から見られる新たな視点は、「手段としての女性性」である。従来の生物学的性とも性役割ともどちらとも捉え切れない。つまり、就職活動や将来戦略選択などのライフイベントにおいて、現実に女性であることを意識せざるを得ない状況の中で新たに出てきた概念と考えられる。一方、このように社会の枠組みに合わせるのではなく、むしろ自分のライフコース設計の中に自分の女性性を生かしていくことは、ライフステージにおける様々な危機（＝発達課題）を乗り越える際に、適応的な機能を果たす可能性がある。

5．今後の課題－女性性概念における生涯発達的視点の必要性

これまで、本稿では女性性についての心理学的研究および近接領域での先行研究を概観してきた。以下3点にわたり、これらの先行研究の限界点を示し、女性性概念把握のため

の生涯発達的な視点より、課題を提案する。

第一に、従来、尺度の作成において男女大学生を対象とすることが多かった点である。確かに量的研究における大量サンプル獲得の必要性から、また性役割が最も内在化され、かつ、自我同一性達成の時期とされることからも、大学生を中心とする青年期が研究対象とされてきたことには意味がある。つまり、多くの尺度は「青年期における女性性」ということになるのである。しかし、発達的視点で考えた場合、[青年期＝男性を意識した女性性→成人期＝多くの場合、家庭をもち子どもを生み育てる母性へのスイッチ] という流れが見てとれるが、現実的には中年期以降は子どもの巣立ちにより、母性という部分は発達できなくなるわけである。その場合、どうなるのだろうか。

第二に、作成されたスケールの項目内容および研究結果より「やさしい」「思いやりのある」「繊細な」などの、社会的に望ましい女性性や理想とする女性性が検討されてきたものの、それが実際、個々人が考える女性性であるかどうかは不明である。

ここに、それを明らかにしていく手がかりになると考えられる、中年期女性の生活および性についての認識を検討した、1つの興味深い研究があるので紹介したい。岩谷（2001）は、40〜78歳の閉経前後の女性297名に質問紙調査を実施し、生活の認識（家庭・仕事・人間関係・健康・経済・生きがい・異性関係・美への関心など）と性の関心について訊ねた。その結果、閉経群の平均年齢は57.09±6.23で、未閉経群の平均年齢は46.72±3.24であり、生活の認識について、「生活への満足」（「生き甲斐を感じている」「友人関係に満足している」など）、「経済的不安」（「現在／将来に経済的な不安がある」）、「美への関心」（「きれいでありたい」「おしゃれをしたい」「いつまでも女性として認められたい」）、「更年期症状」（「更年期障害を感じている／過去に感じたことがある」）、「異性への関心」（「いつまでも女性として認められたい」「異性の友達が欲しい」「異性を意識する」）、の5因子が見出された。その中で「生活の認識」は全体に満足度が高かったが、特に閉経群が有意に高かった。また「美への関心」は両群に有意差がなく、しかも全体に高い結果であった。「異性への関心」は、両群とも低かったが、群間比較では未閉経群が有意に高かった。性の関心については、「手段性の性」（「淋しさ／欲求不満の解消」「自尊心／お金を得る」）、「連帯性の性」（「子孫を残す」「夫婦関係維持」「信頼関係・親密感」「愛を深める」）、の2因子が見出された。「手段としての性」については、両群とも低値で有意差は認められなかったが、「連帯性の性」は、より若い年齢層である未閉経群が有意に高く、性行動を異性との結びつきを意識する「連帯性」として意識していることが明らかとなった。

ここに中年期女性の実態として見られるのは、母親であり子育て終了世代である彼女達は、閉経後も生活の満足度は高く「美への関心」を大いにもつが、それは「異性への関心」からとは限らないということである。しかも、年齢を重ねるにつれて「異性への関心」や異性への結びつきとしての「連帯性の性」意識が低くなることから、中年期女性の「美への関心」は、自分へと向かって進んでゆくと考えられる。

第三に、本論で性役割および母性との比較対象として女性性の先行研究を見てきたが、

近年の心理学研究においては、女性性の研究は注目される研究領域ではなくなっているのではないか、という点である。しかしながら、生涯発達の視点より中年期女性に注目した場合、この年代における女性性研究がまだ十分とはいえない現状では、性役割とも母性とも異なる、女性であるという側面から女性性を検討することは、今後の研究課題として意義あることと考えられる。たとえば、テレビのドキュメンタリー番組「ビューティ☆ウォーズ」（日本放送協会，2007）などでは美を追求する中高年が注目されているが、それは自分のライフステージにおいて「手段としての女性性」として「美への関心」を機能させているのかもしれない。

「人生80年時代の到来」（厚生労働省，1984）と言われるようになって久しいが、厚生労働省（2008）の発表によると、男性の平均寿命は79.19年、女性は85.99年に延び、今や女性に至っては「人生90年時代」である。一方、女性の閉経の平均は50歳前後と言われており、ということは女性は閉経後40年近く、生物学的性の目に見える証としての月経がない時期を過ごすことになる。また、このように成人期以降の人生が大幅に延長した現代では、40歳代が「人生の中間地点」に当たり、この頃より始まる中年期をいかに過ごすかは、人生の仕上げとしての高齢期へ向けての発達課題となり得るため、女性性はそれを支えるための重要なキーワードとなるのではないだろうか。本稿で挙げた課題の視点に立ち、中年期に注目して女性性を明らかにすることは、女性性の概念の捉え直しと共に、女性にとっての中年期というライフステージの捉え直しにもつながると考えられる。

注１：ユング心理学派である山口（1985;1995）は、女性性の元型から示されたイメージとしての女性性についてまとめている。それによると、元型から描かれた女性性として最も際立っているのは母性、つまり子どもとの結びつきである。しかし同時に、男性との結びつきについても多くの元型が挙げられている。つまり女性性の特徴とは、主に母性やエロス、または結びつきにより特徴づけられることが多いと述べている。ただし、勿論それだけではなく、子どもや男性に全く関係ない側面にも触れると同時に、時代や文化により、また一人の女性の内面においても、その時期により優勢となる側面があることも指摘している。

引用文献

我妻洋・川口茂雄・白倉憲二（1967）．カリフォルニア人格検査 CPI：日本版実施手引　誠信書房

東清和（1986）．男性性・女性性の二元的モデル　早稲田大学大学院文学研究科紀要，**32**，39-49.

Bem, S.L.（1974）. The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.

Bem, S.L.（1981）. Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, **88**, 354-364.

Constantinople, A.（1973）. Masculinity-Femininity: An exception to a famous dictum? *Psychological*

Bulletin, **80**, 389-407.

土肥伊都子（1999）．ジェンダーに関する自己概念の研究－男性性・女性性の規定因とその機能－　多賀出版

土肥伊都子（2006）．飲酒の勘定額にみるジェンダー・ステレオタイプ－女性性・男性性との関連－　神戸松蔭女子学院大学紀要，人文科学・自然科学編，**47**，61-77.

土肥伊都子（2008）．男性と女性のステレオタイプ　青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編）　ジェンダーの心理学ハンドブック　pp.97-111.

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり（1989）．ジェンダーの社会学－女たち／男たちの世界－　新曜社

後藤淳子・廣岡秀一（2003）．大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化　三重大学教育学部研究紀要，**54**，145-158.

橋本尚子（2007）．妊娠時心性と性役割観の関連について　京都学院大学経営学部論集，**16**，57-73.

Heilbrun, A.B.（1976）. Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 183-190.

石田英子（1994）．ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証　心理学研究，**64**，417-425.

石崎優子・石崎達郎・桂戴作・織田正昭・日暮眞・原節子（1996）．母性性に関する心身医学的研究（第１報）－現代の日本人のもつ母性性のイメージについて－　心身医，**36**，468-474.

岩動孝一郎（1974）．性分化のしくみと半陰陽　林健太郎ほか(著)　東京大学公開講座　男と女　東京大学出版会　pp.143-167.

伊藤裕子（1978）．性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，**26**，1-11.

伊藤裕子（1984）．心理学における性差研究の動向とその社会的背景　女性学年報，**5**，23-35.

伊藤裕子（1986）．性役割特性語の意味構造－性役割測定尺度(ISRS)作成の試み－　教育心理学研究，**34**，168-174.

岩崎容子（2001）．性役割態度と女性性がセクシュアル・ハラスメントの認知に及ぼす影響－大学生を対象に－　早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊，**8**，27-35.

岩谷澄香（2001）．閉経前後の女性の生活および性に関する認識，神戸市看護大学短期大学部紀要，**20**，39-49.

神宮理香（2003）．女子青年の「女性性志向型」将来戦略の研究－ライフチャンスの相対的剥奪論の観点から－ 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要，**9**，25-45.

角田豊（1994）．共感性と男性性・女性性の２側面との関連　奈良女子大学文学部研究年報，**38**，135-152.

神田道子（1993）．性差別の変動過程を説明する「折り合い行動」概念　女性学研究会編ジェンダーと性差別　勁草書房　pp.22-41.

柏木恵子（1972）．青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究，**20**，48-59.

柏木恵子（1974）．青年期における性役割の認知Ⅲ－女子学生青年を中心として－　教育心理学研究，**22**，205-215.

厚生労働省（1984）．「人生80年時代の社会保障への対応」厚生白書（昭和59年版）＜http://wwwhakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz198401/b0001.html＞（2008年11月25日）

厚生労働省（2008）．「日本人の平均余命(平成19年簡易生命表)」統計調査結果　報道発表資料　2008年７月＜http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life07/index.html＞(2008年11月25日)

Lippa, R.A.（1990）. *Introduction to social psychology*. Belmont: Wadsworth.
間宮武（1979）．性差心理学　金子書房
松本清一（1984）．母性を考える　助産婦雑誌，**38**，278-288.
松本清一（1992）．母性と父性　母性衛生，**33**，5-16.
松浦隆志（2008）．男性性／女性性の二元論を超えて　湊川短期大学紀要，**44**，75-78.
三宅なほみ（1995）．スキーマ　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編集）心理学辞典　有斐閣　pp.468-469.
MMPI 新日本版研究会（1993）．MMPI マニュアル　三京房
Money, J.（1955）. Hermaphroditism, gender and precocity in hyperadrenocorticism: Psychologic Findings. *Bulletin of Johns Hopkins Hospital*, **96**, 253-264.
Money, J., Hampson, J.G., & Hampson, J.L.（1955a）. Hermaphroditism: Recommendations concerning assignment of sex, change of sex, and psychologic management. *Bulletin of Johns Hopkins Hospital*, **97**, 284-300.
Money, J., Hampson, J.G., & Hampson,J.L.（1955b）. An examination of some basic sexual concepts: The evidence of human hermaphroditism. *Bulletin of Johns Hopkins Hospital*, **97**, 301-319.
森美加・高橋道子・牛島定信・中山和彦（2005）．性同一性障害における性役割志向　臨床精神医学，**34**，951-957.
内閣府男女共同参画局（1999）．「男女共同参画社会基本法」法律・計画・会議 ＜http://www.gender.go.jp/＞（2008年11月25日）
内藤和美（1992）．女性役割　伊藤セツ・掛川典子・内藤和美　女性学－入門から実践・応用まで　同文書院　pp.23-48.
日本放送協会（2007）．NHK スペシャル「ビューティー☆ウォーズ」（2007年9月24日）
新村出（編）（2008）．広辞苑第六版　岩波書店
小倉千加子（2000）．セクシュアリティー　東清和・小倉千加子(編)　ジェンダーの心理学　早稲田大学出版部　pp.139-180.
大日向雅美（1988）．母性の研究　川島書店
Rosenkrantz, P., Vogel, S., Bee, H., Broverman, I., & Broverman, D.M.（1968）. Sex-role stereotypes and self-concepts in college students. *Journal of consulting and clinical psychology*, **32**, 287-295.
齊藤千鶴（2004）．摂食障害傾向における個人的・社会文化的影響の検討　パーソナリティ研究，**13**，79-90.
関根聰（2005）．女性大学生における性役割意識　大阪女学院大学紀要，**35**，75-84.
下條英子（1997）．ジェンダー・アイデンティティー社会心理学的測定と応用－　風間書房
Spence, J.T., Helmreich, R.L., & Stapp, J.（1975）. Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 29-39.
鈴木淳子（1987）．フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討　社会心理学研究，**2**，45-54.
鈴木淳子（1991）．平等主義的役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較　社会心理学研究，**6**，80-87.
鈴木淳子（1994）．平等主義的役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究，**65**，34-41.
鈴木慶子・高橋靖恵（2005）．青年期女子の女性性受容－質問紙法とロールシャッハ法による検討－　九州大学心理学研究，**6**，281-293.

鈴木幹子（2001）．思春期女子における女性性受容の発達過程　思春期学，**19**，75-82.

戸上多佳（2001）．新しい女性像の実態に関する研究　日本性格心理学会第10回大会発表論文集，118-119.

Terman, L.M., & Miles, C.C.（1936）. *Sex and personality*. McGRAW-Hill Book Company, Inc. New York and London.

山口素子（1985）．男性性・女性性の２側面についての検討　心理学研究，**56**，215-221.

山口素子（1995）．青年期女子の女性性に関する研究　風間書房

山本雅代（2005）．青年期における性役割タイプと適応について　仁愛大学研究紀要，**3**，39-46.

谷田川ルミ（2006）．現代女子学生文化にみる「女性性」意識に関する研究－ライフコース展望、入学難易度との関連に注目して－　日本社会教育学会第58回大会発表論文集，273-274.

吉原恵子（1995）．女子大学生における職業選択のメカニズム－女性内分化の要因としての女性性－　教育社会学研究，**57**，107-124.

油井邦雄（1995）．女性性の概念とその実証的検証　宮本忠雄(監）油井邦雄(編）　女性性の病理と変容－現代社会における女性性とその逸脱構造－　新興医学出版社　pp.1-26.

（せとやま　あきこ　　大学院生活機構研究科生活機構学専攻）